



八人目のオリンピック選手

愛知淑徳学園 理事長

小林 素文

昨年の八月は、リオ五輪で日本中が沸きたちました。体操から続いた金メダルラッシュ。陸上男子四〇〇mリレー初の銀メダルなど。大会後の東京銀座でのパレードは華やかで、心からの祝福が送られていました。

こうしたスポットライトを浴びた選手達の一方で、思い描いた成果が得られず、無念の帰国をした選手達もいました。しかし、近代オリンピックの父と言われるクーベルタン男爵は「オリンピックで重要なことは勝つことではなく参加することである」と述べ、「自己を知る、自己を律する、自己に打ち克つ、これこそがアスリートの義務であり、最も大切なことである」と語っています。

オリンピック精神にのっとり、ひたむきで、一途な努力を重ねた全てのオリンピック選手にエールをおくり称えたいと存じます。

文武両道を掲げる愛知淑徳は何人かのオリンピック選手を輩出しています。

\*

戦前の高等女学校の時代にも、オリンピック選手に値する生徒がいました。当時の女子陸上八〇〇m日本記録保持者、井戸田きよ子さんです。

しかし、不運な事に、女子には八〇〇mは、過酷過ぎると、

一九二八年のアムステルダム五輪を最後に、オリンピック種目からは消えてしまったのです。八〇〇mが再び日の目を見るのは一九六〇年ローマ大会です。

今からは考えられない事情から、井戸田選手は正式なオリンピック選手になれませんでした。が、広く女子に門戸を開いた女子オリンピックのロンドン大会の八〇〇m決勝で、堂々の世界第6位に入賞いたしました。

井戸田さん達が培った高等女学校時代の淑徳魂は、戦後の愛知淑徳に受け継がれ、オリンピック選手を輩出していきます。

\*

本校出身のオリンピック選手第一号は岩井(旧姓神野)眸さんです。岩井さんは、メルボルン五輪とローマ五輪で自由形の水泳代表選手となりました。

メルボルン五輪が行われたのは一九五六年。愛知淑徳はまだ池下校舎でした。池下校地へ移転した昭和三年当時の水泳部員が、校地にあった甍が池と呼ばれる池で水泳に明け暮れた負けじ魂が受け継がれ、実ったのです。

岩井さんはその後、愛知淑徳の体育の教員となりましたが、結婚を機に退職。平成七年愛知淑徳水泳学校の校長に就任。厳しくも優しい指導で好評を得ました。

二人目のオリンピック選手は窪田(旧姓小林)美和子さんです。メキシコ五輪の自由形の水泳代表選手として、四〇〇mリレーの六位入賞に貢献しました。窪田さんは創立者小林清作先生の曾孫にあたりますが、立派に創立者が掲げた淑徳魂を発揮してくれました。窪田さんは今もマスターズスイミングでプレゼンターをつとめたり、選手としても活躍しています。

三人目は、ロサンゼルス五輪とソウル五輪でバレーボール代表選手となった廣紀江さんです。廣さんは本校卒業後、実業団の熱心な誘いを断り、筑波大学に進学。名センタープレーヤーとして、ロス五輪では銅メダルソウルでは四位入賞に貢献しました。現在学習院大学教授として、スポーツと関わっています。

四人目は、ロサンゼルス五輪とソウル五輪の水泳自由形で代表選手となった水野(旧姓中森)智香子さんです。現在は、東京都千代田区の民生・児童(主任児童)委員として、小中学校などの招きに応じて水泳指導をしたり、ボランティア養成講座で講師をされたりしています。

五人目は、ソウル五輪で水泳の代表選手となった北野高代さんです。種目はバタフライ。一五三センチと小柄な体を全身ばねのように使い、トビウオのように飛び跳ねていく当時十六歳の姿は美しく初々しいものでした。

六人目はアトランタ五輪でソフトボール代表選手の渡辺伴子さんです。左腕のウインドミル投法で、中国戦に見事完封勝利を飾り、日本チーム四位入賞に貢献しました。その後、キャスターや解説者としても活躍されました。

七人目は、ソフトボールで内野手として北京五輪代表選手となった伊藤幸子さんです。北京五輪のソフトボールは、念願の金メダルを見事に獲得、日本中がわきたちました。

ナイン最年長のベテラン選手の伊藤さんが監督から期待されたのはチームのまとめ役でしたが、その役割を見事に果たしただけでなく、アメリカ戦で代打としてタイムリーヒットを打つなど選手としても活躍しました。

\*

井戸田さん、そして七人のオリンピック選手を受け継ぎ、昨年のリオ五輪では、愛知淑徳出身の八人目のオリンピック代表選手が誕生しました。七人制女子ラグビー(サクラセブンズ)代表選手となった兼松(旧姓本間)由香さんです。

チーム最年長の三十四歳でママさんラガーの兼松さんは、チームのまとめ役としても、選手としても活躍しました。

サクラセブンズの結果は、十二チーム十位でしたが、兼松さんは、おばあちゃんとブラジルまで応援にかけつけた娘の前でトライをあげるなどオリンピック精神にのっとり、全力を尽くしました。

兼松さんは、本校在学中はソフトボール部員で、その当時のことを次のように語っています。「チームの中で私はおちこぼれ。だからこそ一人倍努力してものすごく厳しい練習にもがむしやらに取り組みました。『チームで一番足が速いんだから、とにかくボールを当てて塁に出ろ』と顧問の宮沢先生に鍛えられ、右打ちから左打ちに転向。一番バッターを任せられ、ヘッドスライディングで試合を盛り上げることに専念しました」(学園広報一七号)

こうした努力が実り、高三のとき国体出場を果たしています。兼松さんは本校を卒業後、愛知教育大学へ進学したのを機に、五歳から十二歳まで熱中したラグビーを再開。十九歳で国際大会に出場し、第一線で活躍するようになりました。

結婚と出産重ねた後も第一線で現役を続けますが、二〇〇九年ワールドカップ直前に膝前十字靭帯を断裂。二〇一三年ワールドカップを前には左ひざの半月板を負傷。こうした様々の経験を重ね、今回、リオの大舞台で、八歳となった娘の目の前で、トライをあげた本校八人目のオリンピック代表選手、兼松さんは、愛知淑徳の誇りです。心よりの拍手と祝福を送りたいと存じます。

